

コミュニティ大工による 素人参加型の空き家再生と仕上げの手法

(株)まるのこラボ / NPO 法人 穎娃おこそ会

加藤 潤

1. 素人 DIYer からコミュニティ大工への道

私は現在、鹿児島を拠点として「コミュニティ大工」という聞きなれない肩書を名乗り、空き家再生に携わっている。12年前となる2020年、埼玉から都心に通うサラリーマン生活に終止符を打ち、実弟が立ち上げた事業に合流するために薩摩半島の先端にある鹿児島県南九州市穎娃(えい)町という小さな海辺の町に移住した。その際に地域にあった空き家と、海辺の元飲食店跡を借り受けてDIYで改修することで、住居を確保し、職場となる観光施設を開設したことが、空き家再生との関わりの始まりだった。

過疎地には不動産業が機能しておらず、移住者が賃貸住宅を借りるのに苦労するという現実があり、一方で人口減少が進む過疎地の空き家問題は都市部以上に深刻で、多数の空き家があるものの活用出来ず放置されている。過疎地に移住した私も、家探しで不動産業者を頼ることが出来なかったため、地域に存在したNPO法人の協力を得つつ、自ら空き家を探し家主と交渉、DIY改修を手掛けた。他に選択がないが故のやむを得ない対策ではあったが、結果的に空き家を活用することで、この地での暮らしと仕事を生み出したのは貴重な経験だった。

その後、2015年に穎娃町で商店街での空き家再生プロジェクトが始まった際には、家主との折衝や契約の交わし方、DIY改修の経験が活かせることになり地域に交流拠点が誕生した(写真1)。その成果もあってまちが移住者を迎えることになった時、彼らの住居や職場づくりを空き家活用によってサポートし、気付けば2022年までに計11軒の空き家を再生し、交流拠点、宿、シェアオフィス、シェアハウスなどが誕生するに至った(図1)。その過程でさらなる空き家再生ノ-

ハウとDIYスキルを蓄積することとなり、昨今では他のまちでの空き家再生のサポートを頼まれたり、私自身がDIYを絡めた大工仕事を請け負うまでになった。30代の頃、手入れが必要な中古住宅を買ったのを機に週末にはDIY三昧の日々を過ごし、30代半ばでハウスメーカーでもある住友林業(株)に転職したという経歴を持つが、趣味が高じて木材と関わる会社に移っただけで、住宅の設計や施工に関わることはなく、木材の流通業務を担う営業マンに過ぎなかった。そんな職人経験もない単なる日曜大工だった私が、50歳を過ぎてから本当の大工仕事を担うことになるとは思いませんでした。人生というのは不思議なものである。

2. まちづくり、素人目線で空き家再生を担う

技術的には未熟な私が大工仕事の依頼を受けるのは、まちづくりとしての空き家再生に携わった経験が大きいと思う。依頼する側にとっては、空き家を用いて住居、カフェや宿、まちの拠点づくりを手掛けたいと考えるものの、予算的に困難とみられる場合や、施主自身もDIYで参加したいと希望する場合、通常の工務店に相談して良いものか、相談先探しに悩むだろう。また、自身がこれと思った空き家は、本当に使えるものなのか、買ったり借りたりしても良いものなのかなど、そもそも建築に入る前段階から相談したいこともあると思う。そんな相談を受けるうちに、空き家を改修する前段階からのサポートを行うとともに、そのままその後の大工仕事も担うようになってしまったのが、コミュニティ大工としてのこの始まりである(図2)。

コミュニティ大工と名乗るようになったのは、プロの職人としての修行や経験が欠如し腕が劣る私がストレートに大工



写真1 空き家再生による交流拠点づくり



図1 穎娃町での空き家再生事例



図2 コミュニティ大工の紹介

を名乗ることへの遠慮があったためだが、一方で工務店や大工では担えない建築のハード面以外の部分を担うとの意味も込めている。空き家再生においては、不動産やまちづくりなど、建築分野以外への対応も欠かせないし、採算的に難しい場合はDIY参加など施主との協働が効果的であることが分かってきた。素人目線を持った大工だからこそ出来ることでもあるし、通常であれば放置か解体となるはずだった空き家の再生が可能となるケースもある。

3. DIYが生み出すもの

コミュニティ大工として関わる空き家再生の現場は、施主のDIYでの参加が基本となる。空き家再生は、その物件の売買や賃借、家財道具の整理、関係者との調整など実際の改修開始に至るまでに手間が掛かる上、低予算であることが多いが、一方で施主の参加意識の高さも特徴である。施主のDIY参加は、もちろん経費削減の一環という面があるが、自ら手を動かすことで家に対する愛着を強め、自身も施工の責任の一端を担うという側面も持つ。そうすることで施工の不具合にクレームする客 vs 業者という相対関係ではなく、一緒に作り上げるパートナーとなり、結果的に余計なコストを排し低予算での施工が可能となる。

こうして始まる改修作業には、施主のみでなくその仲間も加わり、ワイワイと賑やかに進むことになる。ここで出会った者同士の関係が深まり、改修作業後もこの場の運営に関わる者が現れたりする。施主自身も家の造りを知ることで古民家の特徴やその後の維持管理への理解が進んだり、こうした手法で空き家再生が可能と知った参加者が、他所での空き家再生に動き出したりと、副次的な効果も生まれている。

4. ゆるさを採り入れた素人参加型の現場の様子

さて、素人参加型の現場の様子を再現してみよう。私に関わる現場は、数十万円から数百万円程度と予算規模はさほど大きくはなく、大半は築50年以上の古民家となるが、施主もその仲間も大工仕事は初めてという未経験者が多数参加する。この場で初めて出会う人も多く、自己紹介を交わし、作業中の会話や昼食や休憩時間の雑談も大切にしながら、施工が進んでいく(写真2)。まさに同じ釜の飯を共にすること



写真2 食事や雑談も大切



写真3 自動カンナでの加工作業



写真4 乾燥させた板をさね加工する

で交流が深まり、いつの間にかチームが出来ていく。プロの現場にはないゆるさが求心力を持ち、そんな現場の空気感が好きになり何度も通う人が出てくると、新たな参加者に作業を教える先生役を担ったりもする。

建築というのは、全体を把握し進めることは難しいが、壁や床を貼ったり、塗装したりといった一つ一つの作業自体は分解すれば案外と容易なものが多い。昨今は道具の進化により、素人でも丁寧に進めればきれいな仕上げは可能となるし、施主がその場にいるDIYの現場なら多少のミスも許容される。傾きの判断や下地、建具取り付けなどはプロの領域だが、仕上げ仕事は素人向きと言える。

5. 廃材利用

さて、そうした素人が関わるDIY現場における仕上げについて触れたい。

DIY空き家再生の現場では、畳の床をはいだり、壁をはがしたりと解体作業が伴うことも多いが、この過程で出てくる廃材を用いることが良くある。壁や天井板は薄いこともあって解体過程で破損しがちで再利用が困難なケースも多いが、使い勝手が良いのは畳の下地に使われる野地板である。釘で簡単に打ち付けた程度なので、バールで外し、釘を抜き、汚れがひどい場合は洗って、腰板、縁側やトイレなど狭い部位の天井板、外壁などに再利用する。なお古民家から流用する野地板は、幅や厚みもバラバラなことも多い。これを味と捉え、不揃いのまま、壁として貼ってしまう場合もあれば、現場に持ち込んだポータブル式の自動カンナで厚みと幅を調整して貼り付ける方法などがある。厚み調整を手カンナで仕上げるのはさすがに大変だが、自動カンナで木材を削るのは初めての人にとっては楽しい体験となり、かつ容易な作業となるので積極的に活用している(写真3)。

6. 安価な材料の付加価値化

上述の廃材活用時の釘抜きなどもそうだが、素人参加者が多い現場では、プロがやったのでは採算が合わない手間の掛かる作業であっても、参加者には貴重な作業体験の場として組み入れることが可能となる。こうした考え方からよく使うのが、購入した安価な野地板に加工を加え、内装部材に流用

する方法である。野地板は厚さ 12～15 mm、幅 90～120 mm で、製材所がノコ切りで挽いただけのラフ材かつ未乾燥材となるが、現場で立て掛けて乾燥させて、カンナを掛ければ内装材や外壁材に変身する。前述のポータブルの自動カンナはここでも重宝する。これは中古品を 3 万円で購入したものだったが、これ一台で即席の木材加工ワークショップが可能となり、DIY 向きだ。これまで買った工具の中で最も費用対効果が高いかもしれない。自動カンナで表面がきれいになった板材は、必要に応じて、さらにトリマーを用いて相じゃくり加工を入れたり(写真4)、手カンナを用いて角の面取りもするが、これも素人にも十分可能な作業である。

7. 無垢のフローリング材を用いた床貼り施工

それなりに手間が掛かるが、素人でも作業可能、かつ仕上がりがきれいで、大きな達成感を覚えるのがフローリング材での床貼りである。人手も必要となることから、DIY を伴う空き家再生現場ではメインイベントに位置付け、事前に日程を定めて告知し、10 名くらいを集めたワークショップとして開催することが多い(写真5)。8 帖程度の床貼りであれば素人チームだけでも 1 日で完了する。ただし根太取り付け、高さ調整、断熱、合板捨て貼りなどの下地仕事は前日までにしっかりと終わらせておく必要がある。

フローリング材は古民家に合う杉の無垢材を用いる。さね加工が施してあることから、作業前に簡単なレクチャーを行えば素人施工でも問題なく貼ることが出来る。スライド丸鋸を用いて正確な長さで直角にカットし、コンプレッサーとエアタッカーを用いてしっかりと釘打ちするなど電動工具を活用すれば、早く確実に作業が進む(写真6・7)。ただし最後の 1 列は正確な幅調整した材を入れる必要があり、これは大工の仕事となる。

8. その他の仕上げ

その他の仕上げについて、簡単に触れておく。

○塗り

DIY 現場での壁は、クロスより塗りを多用する。ペンキ、漆喰、珪藻土などはクロスより素人でも作業しやすいし、古民家に馴染む。もちろん漆喰を平滑に塗るとなると左官職人の技術が必要となるが、コテ跡も味と割り切れれば誰にでも挑戦出来る。

○着色と表面保護仕上げ

色あせた既設の柱、梁、壁や、新たに貼った無塗装の壁板などに塗装を施す場合、ホームセンターで手に入る松煙(黒色)、弁柄(茶色)などの粉末塗料を調合して色をつくりつつ水と水性ニスとを混ぜて塗ると、周囲と馴染んだ昔からあったかのような色合いが再現出来る。無垢フローリング材の床も、同様に調合塗料をつくって塗り(写真8)、その上から蜜蝋ワックスを擦り込むことで、施主の好みの色での天然仕上げが可能となる。蜜蝋ワックスも養蜂家から手に入れた蜜蝋を湯煎し亜麻仁油、紅花油などの乾性油を溶かし込むと自身で安価につくることが出来る。

9. おわりに

社会課題ともされ、多くの困難が伴う空き家再生は、既存建築の枠組みでは採算性の厳しさから放置されることも多いものの、まちづくり、素人参加、DIY といった目線を取り入れることで可能となるケースがあることを述べてきた。この実践の一翼を担うのがコミュニティ大工であり、今後はコミュニティ大工の養成も目指したく思う。

また素人参加を伴う DIY 現場においては、参加者をお客様扱いするのではなく、この場を一緒に作り上げる仲間として迎えており、その際に効果的な仕上げ事例を紹介した。コストを抑えつつ、素人にも成果を求めながら現場を廻すために電動工具を多用することが特徴だが、比較的高価な道具も含まれる中で参加者が自身の現場で再現出来ないという課題も残ることから、手軽に入手可能な道具の積極活用や、電動工具のレンタル制度の整備なども模索し、空き家再生のさらなる展開を後押ししていきたいと思う。



写真5 床貼りワークショップ



写真6・7 電動工具による加工

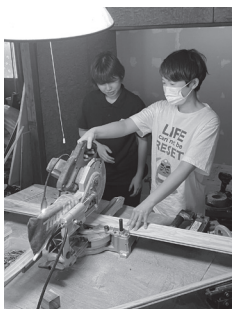


写真8 調合塗料での床塗装